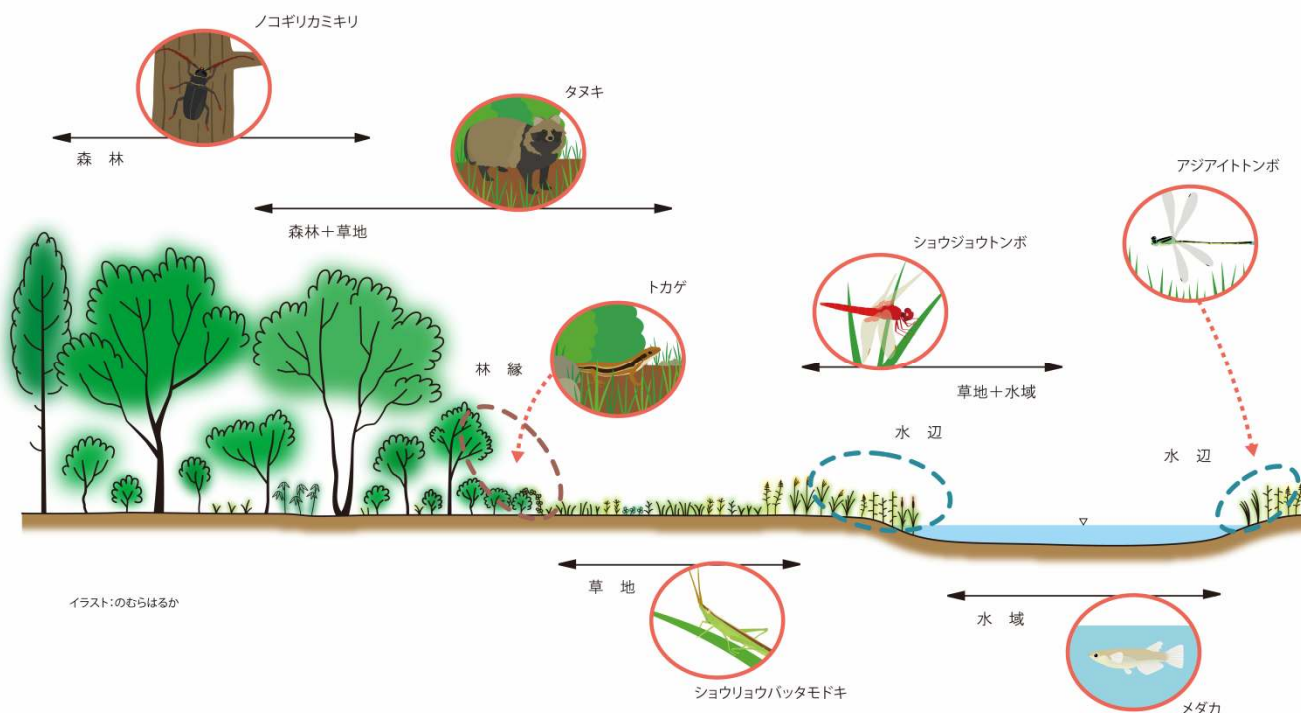


府中のピオトープを見つめて

第5回 自然の見方



自然の形は、その土地の地形と気候により決まると前に述べた。それでは、生き物は自然をどのように利用しているのか。表題の自然の見方とは、生き物側から見た自然の姿のことである。彼らには、その暮らしぶりによって自然がそれぞれ違った姿に見えるはずだ。

身近な自然の代表として、ここでも森と草地と水辺を引き合いに出してみる。

もっとも、どのような自然の姿にしても、森だけ、水辺だけというように一つということはありません。地形に多少の起伏があれば、自然はいくつかの組み合わせで存在する。そのありがちなパターンが森－草地－水辺という連続した姿である。

とはいえ、やはり生き物は一つの自然の形とだけ結びつく。植物はそもそも森や草地のように自然の形を構成している。だからそれらと1対1の関係にある。動物でもこうした関係は少なくない。森にすむノコギリカミキリ、草地のショウリョウバッタモドキ、水辺（水域）のメダカがそうである。彼らは自分の住処から外に出ない。もし出ることがあれば、同類の新たな住処を求めて移動するときである。

しかし、自由生活ができる動物のなかには複数の自然の形を利用するものがある。タヌキはもっぱら森の中を徘徊しているが、夜になれば草地にも現れて餌をあさる。昼間、草地で餌をついばんでいるムクドリ。そのねぐらは森の木々の上である。

親と子で生活する場所がまったく変わるものもある。トンボの幼虫のヤゴは水の中にいるが、親は羽があって飛びまわる。トンボが水辺だけにいると思ったら間違いで、多くのトンボの生活場所は水辺以外である。さらに、ヒキガルやアカガエルの仲間は森の住人である。しかし、オタマジャクシは水中生活者である。

森と草地、草地と水辺などのように、二つの自然の形の境界に好んですむものもいる。このような場所は、森と草地のように、異なる二つの自然に向かう移行帯であるとともに、そこだけに特異な自然の形をもつ。トカゲは森と草地の堺に生じる林縁にすむ。森だけや草地だけでは生きていけない。林縁は餌となる虫が多く、体温調節のための日光浴に適しているからである。

たくさんの種類の生き物が共存するためには、さまざまな自然の姿が必要である。人の暮らしには平坦な地形だけでよいが、それだけでは森―草地―水辺の多様な関係が成り立たない。こうした生き物側に立った自然の見方を、私たちが少しは身に付けていてもよいのではないだろうか。

=====

執筆者紹介：新里達也

1 級ビオトープ計画管理士。農学博士。専門は保全生態学および昆虫分類学。著書に野生生物保全技術（共編）や日本産カミキリムシ（共編）などがある。（株）環境指標生物代表取締役。東京都国分寺市在住。